

Title	支那古姓とトーテミズム(下)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.245- 276
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0245

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

支那古姓とトローテムズム (下)

(三) 姓の種類

古代支那に於ける姓の中左傳に残れる者は、左の二十四である。

媯、姚、姒、子、姬、姜、嬴、風、己、任、姁、祁、挈、曹、妘、董、偃、漆、歸、曼、隗、允、熊、懷、

以上の外、國語に左の十一が見へる。

酉、葳、荀、僖、滕、偃、依、彭、禿、斟、狸、

又詩經の中に左の二種が見へる。

庸、戈、

即ち支那の古姓の全部が、動物、植物と交渉ありと斷言することは出来ない。然しながら田崎仁義氏や城戸幡太郎氏の如く、支那の古姓は、全然トローテム氏族ではないと云ひきる事は不可能である。以上列擧した姓が、果して悉く古代のものなりしやは疑ふべき余地多く、而して比較的重要なる姓の多くは、動物植物、又は自然物に關係ありし如き證據を有してゐる。左にその例を擧げて見やう。

嬌(有虞氏の姓) 説文古籀補によれば。女篇なく爲字のみをもつて使用されておる。然して爲字は、説文卷三下によれば。爲母猴也」とあり、羅振玉の殷虛書契考釋五五枚によれば、「手象を牽く形なり。」と解しておる。何れにしても動物と縁故を持てる文字である。

姜(齋の姓) 女と羊とより成り、羊が此文字の主要部分をなしておる。之と類似せるは羌と云ふ文字である。段氏の説文によれば、「羌西戎羊種也」とあり、恐らく古代支那民族は、此西鄰の蠻族を輕蔑して羊種なりとせしなるべく、蠻族自身も牧畜に従事し、自己の祖先を動物とせる習慣ありしなるべく、「南方蠻閩從レ虫、北方狄從レ犬、東方貉從レ豸、西方羌從レ羊、此六種也」とあるは、支那民族の縁邊に居住する異民族のトーテムズム類似の思想を有せしことを語るものらしい。然して左傳の中に西方の戎狄が、姜姓をなのり、姜戎と稱し、又四岳の裔胄と稱しおりしことは、姜と羌の二字の本來密接な關係あることを示すもので、姜の字の淵源も、その部族が、羊と密接なる關係ありと信せしことに基くのではなからうか。

羸(秦の姓) 女と羸とよりなり、羸は、説文に「羸或は曰く獸名」とある如く、一種の動物名であつたらしい。加藤教授の高説によれば、羸は、よく繁殖する瑞獸の名なるべしとの事である。之は、秦の祖先が、常に牧畜的官職を司りたりといふ傳説と相照應して興味ある事實である。

羣(楚の姓) 説文に「羣羊鳴也、羊に従ふ。氣の上出するに象る、卒と同意」とあり。羊と密接な關係を有する文字である。なほ之と關聯して考ふべきは、後出の傳説と思はるるも、羣姓は、高辛氏の火正なる祝融の子孫と稱せられありし事である。そして周禮の夏官羊人傳には、「羊は、南方火に屬す、

司馬火官故に此在り。」とある。火正と羊とは、依然密接な關係に置かれてゐるのである。

劉師培は、その氏姓學發微に於て、閩は、羊の轉化ならん云つておる。此説は、輕々しく承服出來ぬが、前にも引ける如く、説文には、「閩東南越、蛇種、虫に従ふ。」とあり、國語鄭語によれば、越は、𧈧姓なりとあり、然して説苑篇に「越翦髮文身、爛然章を成し、以て龍子に像る者は、水神を避けむとするなり。」とある。古代に於て越が、𧈧姓なりと信せられしこと、並びに東南越人が龍蛇の子孫なりとせられしことが知られる。越人が龍子に像りしは、或は、水神を避くるに非ずして、野蠻民族に普通に見る例の如く、己の龍蛇族なることを文身によつて表示したトートテム徽號なりしやはかりがたい。然し此點はなほ疑を存する。

熊(羅の姓) 動物名である。但し熊が羅の姓なりといふ事は、左傳の本文になく、杜預の註に見ゆるのみである。又公羊傳宣公八年の條には、「我小君頃熊を葬る。」とあり頃熊を楚女となし、穀梁傳にも同様に記しておる。たゞし左傳によれば頃熊は、敬嬴とあり、何れが正當なるか不明であるが、たゞ楚の國が、國君氏を稱せざる他國の例に反し、國君自ら熊なる氏を有せしをもつて、その女が、他國に赴きて𧈧を稱せず、熊氏を稱せし事も有り得べき事實である。

狸(丹朱の姓) 動物名である。

風(住、宿等の姓) 天然現象であり、その文字は、虫に従つてゐる。

𧈧(夏の姓) 以と女とよりなり、以は、薏苡といふ、李の如き實のなり、妊娠の藥とされし植物名である。

姬(周の姓) 臣と女とよりなり、臣は、本來脩の意を有してある。

子(殷の姓) 卵子を意味し、禮緯に、「契子姓を姓とするは、亦その母胤子を呑みて生みしをもつてなり、」と云ふ傳説を生じてある。その象形は、子供を意味し、十二支の一である。

己(昆吾の姓) 十干の一である。後藤象太郎氏の研究によれば、この象形の意味は、不明なるも、雷紋として古代紋様に多く現れる形式の骨子ならんと云ふ事である。

酉(黃帝の後) 十二支の一である。

姪(郟の姓) 云と女とよりなつてある。云は雲の古文なるも、此姓は、一に嬭と造るをもつて本來の意味は不明である。

以上の研究は、不充分ではあるが、大體諸姓の中動物と關係ありと目せられるもの七、(卵子を含む) 天然現象、十干十二支と關係ありとみられるもの五、植物名が、一、人體の一部の名と思はれるもの一 の存在することが知られる。もとより以上の外動植物に關係せしめがたい姓が、數多存在してある。然し古典の中に屢現れる重立つた姓は、上記の中に含まれておる。それ故田崎氏、城戸氏の説の如く、姓が、動植物の名でないとは斷言する事は出来ない。たしかにその一部は、動物、植物、天然現象等に關係してゐたのである。

註、支那古姓の種類に關することは、三田評論大正十年四月號拙稿「支那古代姓氏の研究(二)姓の種類」を参照せられたし。

(四) 官名傳説の意義

此事實と照應して研究すべきは、姓氏に關係する諸傳説である。一體姓氏の祖先に關する古代の傳説を調べて見ると、ほゞ四種の系統に分れる。一は姬姓の祖、子姓の祖の如く、祖先がある物に感じて生れたと傳へる類である。之を感生傳説と名ける。二は、賜姓傳説であつて禹が天下の福祉を増進したるをもつて、帝より姒と云ふ姓を賜はり、四岳が、よく物を養ひしをもつて帝より姜と云ふ姓を賜はりたりと傳ふる類である。三は地名傳説であつて黄帝は姬水をもつて生れ、炎帝は、姜水をもつて生れし故 各々姬姓、姜姓の祖となつたと傳へる如く姓の起源をその祖先の生誕地に傳會する傳説である。四は、官名傳説とも云ふべきものであつて、雲をもつて官名を紀すとか鳥をもつて官名を紀すとか傳ふる類である。

以上の中賜姓傳説は、加藤教授の高説の如く何事も古代聖王に淵源せしめる支那人の慣用手段であり、姓氏が古代に於て一個の國家なりし記憶、並びに姓氏制度の混亂せし結果、天子が諸侯を封ずるに當り、その姓氏を正し、之に適當と認める姓氏を授與せし事實に基きし説話なるべく、之によつて姓の起源を知る事は出來ぬ。

又第三の地名傳説は、中井履軒が、「もし媯とか姜といふ姓が、はじめ河水の名なりしならば、その文字水に従ふべきである。然るに女に従ふは、水名より姓が、淵源せず、姓より水名起りし證と見るべきである。」と云ふ説の如く之を古傳説と認めがたい。

たゞ第四の官名傳説が、トミズム類似の思想を有する説話として注意に價する。左傳昭公十七年の條に鄭子が、昭子の問に答へ左の如く述べておる。「昔、黄帝氏は、雲をもつて紀す、故に雲師となり

て雲をもつて名づけき。炎帝氏は、火をもつて紀す、故に火師となりて火をもつて名づけき。共工氏は水をもつて紀す。故に水師となりて水をもつて名づけき。大皞氏は、龍をもつて紀す。故に龍氏となりて龍をもつて名づけき。我高祖少皞摯の立つや、鳳鳥適に至る。故に鳥に紀し、鳥師となりて鳥をもつて名づけき。鳳鳥氏は歴正なり。玄鳥氏は分を司る者也、伯趙氏は、至を司る者也、青鳥氏は、啓を司る者也、丹鳥氏は用を司る者也、祝鳩氏は、司徒也、鵬鳩氏は司馬也、鳩鳩氏は司空也、爽鳩氏は司寇也、鵙鳩氏は司事也、五鳩は民を鳩むる者也、五雉は、五工正となす。器用を利し、度量を正し、民を夷かにする者也、九扈を九農正となす。民を扈めて淫する無からしむる者也。顓頊氏より以來、遠きを紀する能はず。乃ち近きに紀して、民師と爲して命ずるに民事を以てす。即ち能はざる故也。」

即ち雲、火、水、龍、鳥をもつて己と特殊な關係ありとなし、その師となり、諸般の官名を名くるにその物をもつてしたといふ思想が、此傳説の精神となつてある。もとより此説話は、當時雲、龍、鳥に縁故ある氏が存在し、その起源を説明せんがため假構した説話なるやも測り難い。しかしその精神である「諸物をもつて官を名く」と云ふ思想は、注意すべきものである。古代支那人は、姓は、各一定の官職と關係ありと考へてゐた。國語楚語觀射父の言に、「民の徹官は百、王公の子弟の質ありて能く言ひ能く聽きて其官に徹する者は、物もて之に姓を賜ひ、以て其官を監せしむ。之を百姓となす。」とあり、百姓は百官を意味したのである。左傳昭公二十九年の條にも、「昔有膠の叔安。裔子あり、董父といふ。實に甚だ龍を好み。能く其耆欲を求めて。以て之に飲食せしめ、龍多く之に歸せり、乃ち龍を擾畜して以て

帝舜に服事す。帝之に姓を賜ひて董といひ、氏を豢龍といひ、諸を濼川に封せり、濼夷氏は其後也、
……有陶唐氏既に衰へ、其後劉累あり。龍を擾すを豢龍氏に學びて、以て孔甲に事へ。能く龍之に
飲食せり。夏后之を嘉し、氏を賜ひて御龍氏と曰ひ。以て豕韋氏の後に更らしむ。夫れ物は物ごとに其
官あり。官ごとに其方を修め、朝夕之を思ふ。一日職を失はば、則ち死之に及ぶ、官を失はば、食せず。
官其業を宿^やくせば、其物乃ち至る。若し之を泯^や棄せば、物乃ち抵伏し、鬱^や湮して育せず。故に五行の
官あり。是を五官と謂ふ。實に列して氏姓を受け封せられて上公となり。祀られて貴神となり、社稷五
祀とし、是れ尊び。是れ奉せりき。木正を句芒といひ、火正を祝融といひ、金正を蓐收といひ、水正を
玄冥といひ、土正を后土といふ。龍は、水物なり。水官弃たる。故に龍生得せられず。」とある。此物
語は、余程發達せる後世のものである事は疑ひもないが、物は皆官あり、官は其物を司り、よつてもつ
て姓を受け、之に對し神秘的支配力を有すと云ふ精神は、原始的の要素ではあるまいか。

オーストラリアの土人は、食用に供せられる動植物、又は生活と必須の關係ある自然現象の類をト
テムとせる民族を形成し、そのトテム動植物を繁殖せしめんがため、又はトテムなる自然現象を調
節せんがため各自魔術的儀式を行ふ習慣がある。従つて城戸氏の如きはトテム民族は、一個の職業團
體である出張されておる。オーストラリアの土人と支那民族とを輕々と比較しがたいが、以上の風習
と姓氏を官職に結びつけ、或物と姓氏の間に特殊の關係ありと認める習慣は極めてトテムイズムに類似
せるものである。

古代支那人は。姓の祖先を各或物と密接な關係あり、或は之を司りたる者として傳へてゐた。祝融は、

高辛氏の火正であり、𪚩姓、曹姓、董姓の祖先と仰ぐ所の者である。棄は田正であり、黍稷を播殖する事を司り。姪姓の祖である。水徳の帝とされたる顓頊は、嬀姓、嬀姓の祖である。木徳の帝とされたる高辛は、子姓の祖である。土徳の王とされたる黄帝は、姪姓、己姓、姁姓、任姓の祖である。木徳の帝とされたる太皞は、風姓の祖である。金徳の帝とされたる少皞は、嬴姓の祖である。火徳の帝とされたる炎帝は、姜姓の祖である。鳥獸を司りたる柏翳は、嬴姓の祖である。龍を養へる董父は、董姓の祖である。

そしてかゝる祖先を有する姓は、祖先の司りたる物と親密なる關係を有すとされてゐた。昭公九年の條に「陳は水屬也、火は水の妃也、而して楚の相ひる所なり」とあり、杜預の註に「陳顓頊の後、故に水屬たり。楚の先祝融高辛氏の火正たり。故に火を治むる事を主る。」とある。即ち祭祀は、その族類に非ざれば、神之を享けずと考へてゐた古代支那人は、祝融を祭ることは、祝融の子孫なる𪚩姓等の者の司る所と思惟したのである。かやうな關係から各神話的祖先を祭祀した姓は、又その祖先の司れる物を治むる力を有せりと信せられたものらしい。

姓が、その祖先を五帝或は五行の神に傳會したのは、比較的新しい思想である。然しその傳説の精神となつておる思想、即ち各姓の祖先を或物に結びつけ、その子孫がかゝる物を治める力ありとする思想は、鄭子の言に現れた雲、水、火、龍等をもつて官名となしたと云ふ古傳説と相照應して極めて注意すべき原始的思想である。或ひは此思想は、上代支那人の間に於て社會の單位を動植物の名によつて別ち、該單位がこの動植物を主つた時代、即ちトーマシズムの時代の痕跡ではなからうか。

(五) 感生傳説の意義

今一つ注意すべきは、姓の祖先の感生傳説である。姓の祖に關する古代の傳説の中、賜姓傳説と地名傳説及び官名傳説は、後代の作物たる國語、左傳等に現れおる故。その比較的後出のものなる事は疑ひもない。之に反し感生傳説は、詩經の大雅、商頌の中に現れおる所から、その起源前三者より稍古きものたる事は推察せられうる。

即ち殷の天子に就ては、詩經商頌に、「天命^{シテ}玄鳥^ニ降^{リテ}而生^レ商^ヲ。宅^ニ殷^ノ土^ノ芒^々々^ニ」と歌ひ、史記殷本紀に、「殷の契、母を簡狄と曰ふ。有娥氏の女、帝嚳の次妃たり、三人行きて浴し、玄鳥の其卵を墮すを見る。簡狄取りて之を呑む。因りて孕みて契を生む。契長じて禹を佐けて水を治めて功あり、……商に封じ、姓を子氏と賜ふ。」とある。周の祖先に就ては、詩經大雅の篇に、「厥初^メ生^レ民^ヲ。時維^レ姜嫄。生^レ民^ヲ如何。克禋^リ克祀^{リテ}。以弗^レ無^レ子^ヲ。履^ニ帝武敏^ノ一^ノ歆^ヲ。攸^レ介^レ攸^レ止^ス。載^レ震^レ載^レ夙^ヲ。載^レ生^レ載^レ育^{ヘリ}。時維^レ后稷。誕^ニ彌^ニ厥^ニ月^一。先^ニ生^レ知^レ達^シ。不^レ訴^ケ不^レ劓^ケ。無^レ菑^レ無^レ害^シ。以赫^ニ厥^ニ靈^一。上帝^ト不^レ寧^シ。不^レ康^ニ禮^ニ祀^一。居然^ニ生^レ子^ヲ。誕^ニ眞^ニ之^ニ隘^ニ巷^一。牛^ニ羊^ニ腓^ニ字^レ之^ヲ。誕^ニ眞^ニ之^ニ平^ニ林^一。會^レ伐^ニ平^ニ林^一。誕^ニ眞^ニ之^ニ寒^ニ氷^一。鳥^ニ復^ニ翼^ニ之^一鳥^ニ乃^ニ去^レ矣^ヲ。后稷^ニ呱^レ矣^ヲ。實^ニ覃^ニ實^ニ許^ニ。厥^ニ聲^ニ載^レ路^一。」とあり、史記周本紀にも之と同一様の傳説を掲げ、「初め之を棄てんと欲す。因りて名けて棄と曰ふ。」と云つてある。即ち姜嫄が、野に出でて、上帝の巨大なる足跡を見て、之を踐み、それに感じて后稷を生むと云ふ傳説である。

以上の傳説は、共に殷及び周の祖先の天の子なる事を説明せんとする動機によつて造られしものである。然しそれと同時に氣が人間以外の物によつて女の腹中に入り子となるといふごく未開な思想が、その中に含まれてゐる事を否むことは出来ぬ。殷の祖先に關する燕卵傳説は、北方アジアに廣く行はれる卵生傳説と系統を同じくするものらしい。今同種の傳説を左に録してみやう。

史記本紀によると秦の祖先の大業は、その母玄鳥の子を呑みて生みし者なる事を傳へ、王充の論衡吉驗篇には、「北夷橐離國王侍婢娠めるあり、王之を殺さんと欲す。婢對へて曰く、氣あり、大さ鷄子の如し、天より我に下る。故に娠めるあり。後に子を産む。猪溷の中に損つ。猪口氣をもつて之を噓く。死せず。復徒して馬欄の中に置く。馬をして藉みて之を殺さしめんと欲す。馬復口氣をもつて之を噓く。死せず。王疑ひて以て天子となし、其母をして收め取らしむ。之を奴畜し、東明と名く。牛馬を牧せしむ。」とあり、夫余の祖先が鷄卵の如き氣に感じて生れし事を傳へてある。

亦好太王の碑文には、「惟昔始祖鄒牟王之基を創むるや。北扶餘より出づ。天帝の子、母河伯女郎卵を剖きて子を出生す。」と見え、魏書には、「高句麗は、夫余より出づ。自ら言ふ。先祖朱蒙、母河伯女、夫余王のために室中に閉さる。日の照す所となる。身を引いて之を避く。日影又透ふ。既にして孕めるあり、一卵を生ず。大さ五升の如し。夫余王之を棄て犬に與ふ。犬食はず。之を棄て豕に與ふ。豕又食はず。之を路に棄つ。牛馬之を避く。後に之を野に棄つ。衆鳥毛をもつて之を茹す。夫余王之を割剖し、破ること能はず。遂に其母に還す。其母物をもつて之を裹み、暖處に置く。一男あり。殼を破つて出づ。其長するに及ぶや、之を字して朱蒙と曰ふ云々。」と見え、其祖の卵生を語つておる。なほ續日本

紀延曆八年の條に、「其百濟の遠祖都慕王は、河泊の女なり。日精に感じて生ずる所」と云ひ、古事記應神天皇の條には、「又昔新羅國王の子あり、名を天の日矛と謂ふ。是人參渡り來けり。參渡り來ける所以は、新羅の國に一沼あり。名を阿具奴摩と謂ふ。此沼の邊に、一賤女晝寢したり、是に於て日耀虹の如く、其陰上を指す。亦一賤夫あり。其狀を異しと思ひ、恒に其女人の行を伺ふ。故是女人、其晝寢の時より姪身して赤玉を生む。爾に其伺へる所の賤夫、其玉を乞ひ取り、恒は褰みて腰に着けたり。此人田を田谷の間に營めり。故に耕人等の飲食を、一牛に負せて山谷の中に入る。遇其主の子天の日矛に逢ふ。……其腰の玉を解き其國主の子に幣す。故に其賤夫を赦す。其玉を將來り、床邊に置く。即ち美麗の嬢子に化す。仍ち婚して嫡妻となる。」とあり、百濟、新羅にも同一様の傳説の存せし事を推せしめる。

亦新羅の始祖に就ては、三國史記に、「高墟村長蘇伐公、楊山麓蘿井傍林間を望む。馬あり、跪いて嘶く。則ち往いて之を觀る。忽ち馬を見ず。只大卵あり、之を剖く。嬰兒ありて出づ。則ち收めて之を養ふ。……辰人瓠を謂ひて朴となす。初め大卵瓠の如くなりしをもつて、故に朴をもつて姓となす。」とある。又同書脫解尼師の條には、「脫解、本多波耶國の所生也。其國倭國東北一千里にあり、初め其國王女國王女に娶り。妻となす。娠めるあり。七年にして乃ち大卵を生む。王曰く。人にして卵を生む不祥也、宜しく之を棄つべし。其女忍びず、帛をもつて卵を裹み、寶物を并せて櫝中におく。海に浮べて其往く所に任す。初め金官國の海邊に至る。金官の人之を怪みて取らず。又辰韓阿珍浦口に至る。……時に海邊老母繩をもつて引いて海岸に撃つ。櫝を開いて之を見る。一小兒在るあり。其母取り

て之を養ふ。壯なるに及び身長九尺、風神秀朗。智識人に過ぐ。或は曰く、此兒姓氏を知らず。初櫛の來れる時、一鵲あり。飛び鳴いて之に隨ふ。宜しく鵲字を省いて昔をもつて氏となすべし、櫛を解韞して出づ。脱解と名づくべし云々、又同九年の條に、「王夜金城西始林樹間に鷄鳴の聲あるを聞く。運明瓠公を遺して之を視る。金色の小櫛あり、樹枝に掛く。白鷄其下に鳴く。瓠公還り告ぐ。王人をして櫛を取り、之を開かしむ。小男兒あり。其中にあり。姿容奇偉。……其金櫛より出づるをもつて金氏を姓とす。始林を改めて鷄林となづく。因りて以て國號となす。」とある。

加羅國の始祖も卵生であつて、光武帝建武十八年壬寅三月禊浴の日。天より紫繩が垂れて地に着き、その下に紅幅に包みし金合子あり、カラ人集り開いて之を視るに、黄金の卵六圓くて日の如きものあり、化して童子となり。各々六伽耶國の主となつたと傳へておる。

此と同型の傳説はウイグル族の間にも傳へられてゐた。カラコルム山より發源せしトウガラ、センリガ兩河の會流點に二本の樹あり。その間に忽然一個の塚を生じ。天上より一道の光線之を照した。かくてこの塚は、日々に生長した。畏兀兒人は、この奇事に驚き、敬して之に近きしに人の歌へるが如き音樂は聞えてきた。やがて發達の極に達すると門があつて自から開き内に五個の天幕に似たる者あり。一條の銀線より垂下しており、而して天幕には、各々幼兒ありて之に座し、口に含める管によつて滋養をとつてゐた。この幼兒の中最後の *BONCOM-TEKIN* が容貌精神技能第一にすぐれしをもつてえらばれてウイグルの汗となつたと云ふ。此説話に於て卵子は、天幕と變化してあるがそのモチーフはカラの神話と同一である。(ドーンソン蒙古史による。)蒙古民族の間にも卵生傳説が存し、蒙古源流(卷一)に「色哩特贊博

汗の子智國本贊博汗といふ。奸臣隆阿木のために篡弒せられ。其三子皆亡出す。……次子博囉咱逃れて包地方に往く。……隆阿木汗位に據る、甫半載、舊日數大臣あり、福晉を將て他邦に移住し、興復を設計す。遂に之に背叛し、隆阿木を誅戮せんとす。汗の三子の内選びて一人を立て即位せしめんと議す。福晉云ふ。我從前博囉咱を生みし時、夜一白色人と同寢すと夢む。復るに迄び、一卵を産む。此子卵中より出づ。此を觀れば當に是一の有福佳兒、宜しく將に彼を迎へ至るべし。」とあり、博囉咱の卵生を傳へておる。

以上の諸傳説中朝鮮民族、蒙古民族等に關する卵生傳説は、太陽崇拜に基けるものらしい。卵が太陽の象徴なることは、その神話の中常に金色として、或は又太陽の光線に關聯せる物として表されてゐることから推定する事が出来る。滿洲民族に於ては卵に非ずして朱果となつておる。清朝の祖先の傳説によれば、長白山の東に布庫里山あり、その山下に布爾故里と云ふ池がある。其池に昔恩古倫、正古倫、佛古倫と云ふ三人の天女が、浴してゐた。浴し畢つた時。神鵲が、飛び來つて、朱果を銜んで季女の衣に置いた。季女が、之を口中に含むと忽ち腹中に入り、遂に孕んで、一男を生んだ。之が清朝の祖先であると云ふ。白鳥博士の高説によれば、此朱果は、鵲と共に太陽のシンボルであると云ふ。かく北方民族に於てはその卵生傳説は、太陽崇拜に基いておる。今日でも中央アジアのタタル人の間に於ては、結婚の翌朝、夫婦は、戸外に出されて、旭光に照される。未開人は、旭光を浴びることをもつて新婚の夫婦を多産ならしめる最も有効な手段と思惟してゐるのである。同じ習慣は、かつてシベリアのトルコ人の間に行はれた。同種の例は、ハートランドの「Primitive Paternity」卷一、八十九頁より九十八頁、フレーザ

一の「Golden Bough」三卷に數多く集められてゐる。

般の燕卵傳説は、直接太陽妊娠と關係ない。此場合は寧ろ卵子自身が多産の象徴として解せられてゐるらしい。ルセアニア人は、牡鶏を殺して、その腹中にある未熟の卵を不妊の女の腹中にいれる習俗を有してゐる。ジブシイの夫は、卵をとつて、その身を妻の口に吹きかけ、女は、之を呑んで子を生まうとする。その他各地に存しておる結婚式の時卵子を花嫁に食せしめる習慣、不妊を醫すため卵子を用ひて種々な呪をなす習俗、何れも卵が妊娠を來すといふ信仰より生じたものである。(S. Hartland: Primitive Paternity, vol I, Page 57) 般の契の母が、卵子を呑んで契を生んだと云ふ説話は、やはりかやうな女が、外物である卵に感じて妊娠すると云ふ未開人に普通な思想によつて生じた古傳説であらう。般の感生傳説に對して周の感生傳説は、姜嫄が、足跡に感じて棄を生んだといふ形式になつてゐる。姜嫄は、之を怪んで隘巷に捨てると牛羊が之をおほひて我子の如く愛す。平林に捨てると人が來る。寒氷の上におくと鳥が之を覆ひ、暖める。そこで非常の子なるを知つて收め養つたといふ。

足跡によつて感生したと云ふ説話は、一寸不思議な様に考へられるが、多くの民族の間に同種の傳説の存在する事を知れば、之も卵子の説話と同様に未開人が懷胎を外物の作用に歸した原始思想の痕迹であると思はれる。即ちハートランドの前記の書物には、手の觸れたことによつて懷胎したり。人の寢た跡に坐したることによつて妊娠したりした數多の傳説が集められてゐる。(Primitive Paternity, vol I, 17-21)

なほ此周の傳説に於て注意すべきは、かくして生れた子供が、一時棄てられるといふ形式である。夫

餘の傳説に於ては、婁離國王が、侍婢の夫なくして娠めるを疑ひ、その子を猪溷の中に棄てしめたが猪が、口氣をもつて之を嘘く。馬欄の中に徒すと、馬は、踏み殺しもせず、復口氣をもつて之を嘘く。王がもつて天子なりとして其母をして收め取らしめたとなつておる。高句麗の場合も之と同様である。新羅に於ては昔脱解は、多波那國王妃の子で王は、妃が大卵を生みしを不祥なりとし、棄てしめたので、母は、之を櫛中に入れて、海に浮べたとなつておる。之と同様な形式は、各國民の神話の中に見る事が出来る。

舊約全書出埃及記によれば。英雄モーゼは、その出生に際し藺の箱舟に入れられ、之に瀝青チヤンと樹脂ヤビとを塗つて河邊の葦の中に放棄された。又日本神話中の水蛭ヒルコ子は、葦舟に入れられて流されたローマの神話によるとアルバの王弟アムリアスは、兄王の位を奪ひ、その女をヴェスタの齋女として生涯獨身に處らしめんとした。然るに彼女は、不思議にも妊娠して男の双兒を生んだ。王恐れて臣僕に命じ小兒を小さき籃に入れ、河に棄てさしめた。おりしもタイバー河が、水嵩増しておつたので彼は小兒を土堤の傍に置いて去つた。然るに水量次第に増して、遂に其籃を浮べ、安全なる地點においた。すると狼が彼等を乳養し、喙木鳥が彼等を常に護り養つた。此兒の一人こそ後にローマの建設者となつたロミユラスである。

フレーザーは、その「Folklore in the old testament vol. II」に於て同種の傳説を多く擧げし末、かゝる傳説に於ける幼兒を水上に捨てる形式は、素性の疑はしき子供を水中に投げこみ、泳ぐか沈むかによつて子供の正不正を判断する古の習慣の痕跡であらうと結論してある。即ち古代人は水の神によつて母

の罪を判じやうとしたのである。此と同じ性質の神話は、古事記に現れた木花咲耶媛の物語である。木花咲耶媛が僅か一夜にして妊めるをもつてニニギノ命は、その兒の正嫡を疑ひ、國津神の子ならんといはれた。そこで媛は、産屋に火を著け、その火の盛に燃えしきる中に子を生れ、もつてその天神の子なる事を證した。此は白鳥博士の高見の如く火によつて子の正不正を判せんとした習慣の痕跡である。火或は水によつて罪を判せんとした思想は、又深湯フカダチとなつて日本の上古に残つておる。即ち生兒を氷上又は水上に棄てるといふ周の棄、新羅の昔脫解等に關する傳説は、不祥なる子を水の神に委ねてその判断を請はむとした古代思想に基くものと思はれる。

更に今一つ問題となるのは、周の祖先棄が、隘巷に捨てられた時、牛羊之をおほひ、寒氷の上に置いた時鳥が之を覆ひ暖めたといふ筋である。夫餘の傳説に於ても子供は、猪溷の中に棄てられ、又馬欄の中に徒し置かれてゐる。その兩者の場合に於て、動物は子供を愛撫し、育て、おる。左傳宣公四年の條に鬪伯比が邲子の女と淫し、子文を生み、邲夫人が、之を雲夢の澤中に捨てせしめた。すると虎が之に乳を飲ませて養つてゐるので。邲子之を收めしめ楚人の語にて乳を穀と謂ひ、虎を於菟といふので鬪穀於菟と命じ養つた。之が後の令尹子文と云ふ賢者であると云ふ説話がある。又史記大宛列傳に烏孫の王昆莫に就て、「昆莫の父は、匈奴の西邊の小國也。匈奴攻めて其父を殺せり、而して昆莫生れて野に棄てらる。烏肉を嘍よんで其上に蜚ひぶ。狼往いて之に乳す。單于怪みて以て神となし、而して之を收長す。」とある。

周書異域傳にも突厥の祖先が、匈奴より分れ、部落を造りたるが、後鄰國のため破られ、其族を滅盡

された。只一人年十才の小兒がゆるされ、足を削られ、草澤の中に棄てられた。すると牡狼が、肉を興へて之を飼ひ、長ずるに及び、之と交合して孕んだ。隣國の王、兒の尙生存せるを聞き、重ねて人を遣して之を殺した。狼は遂に高昌國の北山に逃れ、山中の穴に匿れ、十男を生み、その十男が各一姓となり、其中阿史耶と稱する姓が、蕃息して突厥となつたのであると傳へておる。

此等の傳説に於ける共通點なる生兒が遺棄せられ、禽獸之をはいくむと云ふ形式は、如何なる動機より起つたのであらうか。恐らくその生兒の正しきか否かを荒野に遺棄し、禽獸によつて判せんとした古代思想の痕跡ではなからうか。即ち前にあげた *fire-ordeal* 又は *waterr-ordeal* に對して *animal ordeal* とも稱すべきものではなからうか。隋書の倭國傳の條に、倭人が曲直を判するに蛇をいれた瓮かまひの中に手を入れて之を取らしめ、蝥されたものを曲者なりとする風のある事を述べておる。大國主命が根の國にゆかれし時スサノヲノ命が之を蛇室、蜈蚣、蜂の室に入れたといふ説話も同じ思想に基くかも知れぬ。要するに古代人の間には、素性の知れぬ生兒を或ひは家畜の居處に棄てたり、又は山野に遺棄してもつて動物をしてその正不正を判せしめた習慣が存しておつたのでなからうか。その際禽獸が之に危害を與へず、却て撫育したので之をとつて育てたといふ形式が生じたのではあるまいか。

なほ注意すべき現象は、此等の感生傳説に於て事件が水邊に起ると云ふ形式の共通なる事である。有城氏の女は、水浴の際玄鳥の卵を呑んで孕み、契を生むだ。高句麗の祖先の母は河伯女郎である。百濟も然り。天の日矛の妻の母は、阿具沼と云へる沼の邊に晝寢して日光に感じ、赤玉を生んだ。昔脱解は、積中に入り。海中を浮んで新羅の海岸に漂着した。加羅の始祖は、禊浴の日に天から下つてきた。清朝

の祖先も三人の天女が、池に浴せる際鵲の齎せる朱果によつて生れたのである。

何故にかく水邊と關係あるのであらうか。之は恐らく二種の原因より起れるものらしい。その一は前述せし不祥な兒を水の神に委ねてその判断を請はんとした古代思想に基いたものと思はれる。昔脱解の傳説の様な或國の王妃が卵を生み、不祥のものとして櫃に入れて海に流したるに、流れ流れて異國の海岸に着く。水邊の女が之を拾ひとり。割つてみると中から子供が出るといふ説話は、此種の系統に屬する。

今一つは禊浴によつて子無き疫を去らうとした古代人の習俗に基くのではなからうか。詩經の燕卵傳説を解して毛傳は、簡狄が、高辛氏に配し、帝と郊禛に祈つて契を生んだのであると解し、集傳にも、春分立鳥降る時簡狄郊禛に祈り、その際立鳥の遺せし卵を簡狄呑んで契を生んだのであるとなしておる。郊禛は恐らく結婚をつかさどりし神なるべく此神を郊外に祀りしことは上代支那人の結婚習俗を推察する上に興味ある事實である。然し史記に於ては簡狄帝嚳の次妃たり、三人行いて浴し、立鳥の卵を呑んで契を生んだのであるとなしておる。此場合の水浴が子を授からんとした願望に出でたものであるか不明であるが、此種の習俗は數多の民族の間に見受ける。サルデヒニアに於ては子を得んが爲め女は、海に浴することをすゝめられる。モロッコのアグルに於ては、子供を生むか、生まれぬかを知りたい Schih の女は、夏至の日及び次の二日に海岸に行つて七度波をして身體の上を越えさしめる。もし子供を生むものならば、まもなくその幸福に浴する。此場合は呪が、占に變化したのである。南方メキシコに於て普通サワバと呼ばれるある特別な小河で女が水浴すると子供を授かるといふ迷信が

ある。又普通住宅内にある發汗浴室に入浴することも多産ならしむると信せられてゐる。印度に於ては此目的のための水浴が周知の事實である。Siilkot と Kalowai の間の公道に位する井は、Puran の投げこまれたもので、彼がその中に住するといふ信念からこの地方の女はその井に浴すると妊娠すると信じてゐる。又印度人の女は時として奇妙なる方法で子を授からんとする。たとへば甘蔗の畑中の小舟や、實のなつたマンゴの木の下で行水を使つたりする。甚しいのは七軒の家を焼いてから此方法を行ふ迷信がある。英國法律が禁じたので女は、こつそり日曜の深夜、雲のない夜、できれば十字路で七軒の家の藁屋根から少許の草をとつて焼し、その火で暖めた湯に浴する。又日曜又は火曜の夜或はデヰワリの祭の間女は床几の上に坐して井の中に吊し下げられる。そこで裸體となり、水浴する。それから又引き上げられて Chaukurna といふ式を行ふ習俗がある。聖泉が疫を治し子を興へるといふ信仰は、歐州各國に會つて存し、又今尙存在する習俗である。此種の習俗は、やはりハートランドの「Primitive Paternity」第一巻の六十四頁以下に數多くの類例が集められてゐる。契の母や、清朝の祖の母なる天女が水浴の際妊娠したと云ふ神話、加羅の祖先が三月禊浴の際天から下つてきたと云ふ傳説は、何れも水浴によつて子を授からんとした原始人の信仰から出たものではなからうか。ごく僅少な材料でかやうな推論をなすのは危険であるから自分はたゞ一個の假定として此意見を呈出するに止める。「毛詩」卷四鄭風溱洧篇の註に鄭國の俗三月上巳の辰蘭を水上に采り、以つて不祥を祓除すとあり、此日鄭國の人溱水と洧水の邊にあつまり、蘭を採り、かつ香草を相贈つて情を定め、上古日本の歌垣の如き習俗を行つたものらしい。此習俗は、鄭の燕姑の傳説、即ち蘭によつて妊娠し、その生子を蘭と名づけたといふ傳説、及び

上古支那で生れの不明な子を蘭子と名づけた習慣などと相待て上代支那人の間に不祥をばらふと共に子なき疫を去らんとした禊の風の陽春三月水邊で行はれたことを語るものではあるまいか。

議論が少し岐路に入つたけれども要するに燕卵傳説や大人足跡傳説に於て最も注意しなければならぬのは女が外物に感じて妊娠するといふ形式である。此は生誕を動植物又は自然物の作用に基かしめんとする未開人の心的動機に出づるものであつて更にその發達せるものが、動物と人間、又は神と人間の結婚を物語る神婚傳説であると思ふ事が出来る。今此種の傳説を更に叙述して見ると、詩經大雅崧高の篇には甫侯及び申侯を崧岳の神の生む所と傳へてある。國語鄭語に、「夏の衰ふるや、褒人の神化して二龍となり、以て王庭に同ひとひて言ひて曰く、余は褒の二君なりと。夏后之を殺さんと之を去らんと之を止めんとを卜するに吉なることなし。其祭を請ひて之を藏めんと卜するに吉なり。乃ち幣を布きて策をもつて之に告ぐ。龍亡げて祭あり。櫃にして之を藏め、傳へて之を郊せり。殷周に及ぶまで之を發くことなきなり。厲王の末に及びて發きて之を觀る。祭庭に流れて除くべからず。王婦人をして幃せずして之に諫かしむ。化して玄龍となり以て王府に入る。府の童妾未だ盡く斃せず之に遭ひ、既に筭して孕み、宣王に當りて生めり。夫あらずして育む。故に懼れて之を棄つ。」と見え。童妾玄龍と化したる靈魂に感じて子を生みし事を傳へてある。又周語に「昔昭王房に娶り、房后と曰ふ。實に爽徳あり。丹朱に協ふ。丹朱身に馮依して、以て之を儀す。穆王を生む。」とあり。韋昭の註に、「房后の行丹朱に似たるあり。丹朱其身に馮依して、匹偶し、以て穆王を生むを言ふなり。」とある。又楚辭天問篇には「女岐夫に合ふなくして九子をとる」と云ふ一節がある。

更に漢の高祖は、史記によれば「母を劉媪といふ。其先劉媪嘗て大澤の陂に息ふ。夢に神と遇ふ。是時雷電晦冥。太公往いて覩る。則ち蛟龍を其上に見る。已にして身めるあり。遂に高祖を産む」と見え。その外伏犧氏は、其母華胥が、大人の足跡を履んで生れたりといひ、神農氏は、其母女登が神龍に感じて生れたりと云ひ、小昊は、母女節が大星虹の如く流華の渚に下るに感ずといひ、顓頊は、母女樞が、星の月を貫くに感ずと云ひ、帝堯は、母慶都が、赤龍と合昏して生るといひ、舜は、母推登が、大虹に感じて生ると云ひ、禹は、母修紀が、流星に感じて生ると云はれてゐる。

元朝秘史によれば、元朝の祖阿蘭豁阿は、光線に感じて三人の子を生むと傳へられ、更に又その始祖は蒼色の狼と惨白色の鹿との間に生れたと稱してゐる。魏書外國傳高車の條にも、昔匈奴の單于二女を生み、容姿美なるをもつて、單于之を天に與へむとし、國の北なる無人の地に高臺を築き、其上に之を置いた。四年後一老狼が、晝夜臺を守つて咆哮し。遂に臺の下に穴を穿つて住し。片時も去らなかつた。そこで其小女が、是を神物なりとし、臺を下り、狼の妻となり、子を生んだ。その後が滋繁して高車國を成したのであると記してゐる。

後漢書南蠻西南夷列傳には、昔高辛氏が、犬戎の寇に苦しみ、天下に有能なる者を募り、もし犬戎の將吳將軍の頭を得たる者あらば、少女をもつて妻せんと約した。すると帝の畜狗の槃瓠と名くるもの、吳將軍の頭を銜へて、闕下に至つた。帝は、大いに喜び。かつ如何にして之に報ひんかと議した際、女は帝の令違信すべからずとなし、進んで犬の妻となつた。三年を終て六男六女を生み、槃瓠死したる後此等の子供が、相婚して夫婦となつた。是長沙武陵の蠻の祖先であると記してゐる。亦哀牢夷に

就ては、其先婦人牢山に居る。嘗つて魚を水中に捕へ、沈木に觸る。懷妊を感ずるあるがごとし。子十を生む。後沈木化して龍となり、水を出づ。小子の背坐するを見る。因つて之を舐る。其母鳥語、背を謂ひて九と白ふ。坐を謂ひて隆といふ。因りて之を名けて九隆といふ。長するに及び黠なり。諸兄弟推して王となす。」とある。亦チベットの神話的祖先も猿と羅刹女の夫婦である。

此等の傳説に於ける女が、外物に感じて妊娠すると云ふ形式は、たゞアジアに於けるのみならず、ひろく世界各國の人種の間に行はれておる。かやうな傳説は、支配者階級が、自己の家系の神聖なる事を假託せんがため、捏造したと見る事が出来る。帝が、玄鳥に命じて商を生むと云ふ説話や、姜嫄が、帝の武敏を踐んで妊むと云ふ説話は、支配者階級が自己の天子なる事を信せしめんとする統治上の必要から作爲された證據を示しておる。然し一面から見ると人間以外の物の形となつて靈魂が女の腹中に入ると云ふ未開な思想がその基礎となつておる事は否むことは出来ない。

ドクトル、リバーメが、南メラネシアのバンクス島の土人の間に存するトーテムイズムに關して左の如く報告してある。バンクス群島のモタ島にはある動物の肉、及びある果實を食する事、ある樹木に觸れることを禁止されたものが多數おる。その禁止は、多くの場合彼等が、その動物、又は果實それ自身であり、其母が受胎に際し、或は妊娠の期間内に於て。かゝる動物及び植物からある影響を受けたと、信せられてゐるからである。その一例をあぐると、ある女が、庭か藪か海岸に坐して、その腰卷に動物か果實かを發見する。彼女は、それを持つて村に歸り、村人に見せ、その人々からその動物の性質を持ち、或はその動物自らである子供を生むと云ふ事を教へられる。そこで女は、その動物を、もと發見し

た所に持ち帰り、その周圍に桓根を造り、毎日訪れて餌をやる。暫くしてその動物が見えなくなると、それはその女の腹中にはいつたのであると信せられる。例へばある女が、その腰巻に動物を見つけ、注意深く両手の中に入れて村に持ち歸つた。そして村人に見せるため手を開いた時、動物はもう見えなくなつた。それは藪から村に來る途中女の腹中に入つたのであると信せられた。

かくして子供が、生れると、その子は、母の發見して養つた動物と同一視され、一生涯その動物を食ふ事が禁せられる。その禁を犯すと瀕死の重病にかゝるのである。母の見つけしものが、果實であると、子供は、生涯それを食ふことが出來ぬ。又はその木に觸れることは出來ぬ。又子供は、その同一視された動物の身體的精神的性質を帯ぶると信せられてある。もしその動物が海蛇であるならば、子供は弱く懶惰である。もし寄居蟹であるならば子供は痲癩もちである。」

フレーザーは、このパンクス島土人の習俗とオーストラリアのアルンタ種族のトータミズムとに立脚し、左の如く論じておる。「野蠻人は、女が懐胎すると何か或物がその身體中に入つたのであると推定する。それは何物であり、如何にして女の腹中に入つたのであらうか。授胎の行爲と懐胎の最初の徴候との間に介在する時間の經過は、兩者の間に連絡を認める事を妨げる。又發情期間に於ける兩性間の性交の無制限は、必然不妊の性的結合の存在を知らしめる。此兩者の理由から懐妊の最初の徴候とそれより以前に起つた性的行爲との間の聯絡を考へ及ばない。彼等は、女が胎動を感じた刹那子供が女の身體にはいつたと考へる。胎動は、實際の受胎より遙か後でなければ起らない現象である。従つて母は、その身體の中に神秘的な働きを始めて感じた時、何物かその瞬間にその身體の中に入つたと想像

する。その時丁度カンガルを見つめてゐたり、或は草の實を集めてゐたり、水浴しておつたり、ゴムの木の下に坐してゐたならば、カンガルか、草の實か、水か、ゴムの木かの靈魂が、その身體の中に入つたと考へるのである。そしてその生子は、カンガル、草の實、水、ゴムの木であるとか考へられる。彼等は、かゝるものを食つたり。觸つたりしてはならぬ。これがトーテムズの原始的形態である。トーテムズは、この形式のトーテムズを妊娠トーテムズと名づけておる。

かやうな妊娠トーテムズをもつてたゞちにトーテムズの起源であるとする事は、早速許容せられにくい。古代支那の感生傳説とオーストラリア、メラネシア土人の思想とを比較すると兩者の間の著しい類似點が発見せられる。感生傳説の根本思想は、或は足跡に觸れて妊み、卵子を呑みて妊み、又は哀牢夷の如く沈木に觸れて妊娠を感じたと云ふ類である。此等の思想は、メラネシア土人の如く外物が妊娠に間接な影響ありと信じ、オーストラリア土人の如く、胎動を感じた刹那その附近のトーテムの靈魂が身體に入るといふ思想とさしたる相違はない。支那人は震なる文字をもつて妊娠を表してあり、詩經大雅にも、姜嫄が、帝の武敏を履み、即ち震み、即ち夙しむとあるのは、彼等が始めて胎動を感じた刹那を受胎と考へた思想の痕跡ではなからうか、又周や殷の天子は天の子孫として代々天帝を祭つておつた。勿論此場合玄鳥や大人の足跡は、子孫に祭られた痕跡はないが、左傳宣公三年の條には感生傳説に似た穆公蘭の傳説がのつておる。鄭の文公賤妾あり、燕姑と曰ふ。夢に天已に蘭を興へしむ。曰く余を伯鸞となす。余は而の祖也。是を以て而の子となさん、蘭國香あるをもつて人の之に服媚すること。是の如くならんと也。既にして文公之を見る。之に蘭を興へて之を御せんとす。辭して曰く。妾不才な

り。幸にして子あるも、信せざらんとす。敢て蘭を徵とせんか。公曰く諾と。穆公を生む。之を名けて蘭と曰ふ。……穆公疾あり、曰く、蘭死れば吾其れ死せん。吾生せし所以。蘭を刈りて卒す。之によれば穆公は自分の生誕と關係ある蘭を、自分と同一視し、蘭刈られる時、自分も死ぬと信じてゐる。これは恐らくもと感生傳説なりし説話の變形したものであり、己の生誕の原因である外物を己と同一視する思想の痕迹であり、上代支那人の感生によつて生じた子供をその外物と縁類視したことを語るものではなからうか。

漢民族周圍の民族中その感生傳説、又は神婚傳説を有するものは、自己の祖先の生誕の原因なる外物を崇敬し、その部族の名としたり。その記號としたりする傾向を有してゐる。後漢書によれば哀牢夷の祖先は、婦人が、沈木に觸れて感じ、生んだ子である。其後その沈木が化して龍となり、水を出でその子が背坐せるを見て之を舐つた。かく哀牢種族は、龍の祖先を有するが故に、龍の像を身體に文身し、上衣に龍の尾に象りしものをつけたといふ。同じく後漢書によれば蠻種族一名獠種族の祖先は、犬と王女との相婚して生れしものである。彼等は、今日も犬を祖先とし、その犬の神像は、河内のフランズ極東學院に所藏されておる。蠻のある部族は、犬の肉を食ふことを禁じ、又ある部族は、その衣服を犬の尾の形になしておる。又女の肩には隋圓形の模様が刺繡されておる。之は犬の祖先が、その妻りし王女の肩に印した爪の痕を表すといはれておる。福建のシャと呼ばれる小部落も、同じく犬頭の祖先より出たと傳へられ、かつ犬の像を崇拜する殿堂を持つてゐる。(印度支那人種に關する材料は、ラウフェルの研究「印度支那人種に於けるトイテミズムの痕迹」によれり。)

一體印度支那人種中には、トーチズム類似の風習が現今でも行はれてゐる。アンリイ、マスベロの研究によれば。タイ、ノイ種族の間においては、家族の名と、同名の物を禁忌する習慣が存してゐる。ラウと云ふ家族は。筍(ノ、ラウ)を食ふことが出来ぬ。ヅキと云ふ家族は。扇(ヅキ)を食事中、飯の出る間使用してはならぬ。トンといふ家族は。銅(トン)の小片を帽子につけてはならぬ。そして此等のタブーを如何なる祓除によつても脱却する事は出来ない。亦タイ、ノイ人のある家族は、虎に對し支配力をもつてゐる。そして彼等は、猫の肉や、狩をなすことが禁忌されてゐる。亦死虎を祖父と呼び。それを葬らねばならぬ。エー、ヘンリイの研究によれば、ツエ、マオの裸體の間にも同じ風習が行はれてゐる。人の字を聞くのには。普通その人の觸れないものは何であるかと聞く。即ちブール(佛手柑)といふ字の者なら、その場合「私は佛手柑に觸れない」と答へる。たゞしラウフェルは、コロ種族に就ては。ヘンリイの研究だけを引用してゐるが、アルフレッド、リエタルの一九一三に出版した「Le Ton-lo p'ou au Yuu-Nan」によれば、ヘンリイの研究は、コロの一部落のみに偶然存せし事實の報告にすぎずコロ種族全體には、動植物を字に附する習俗を發見することが不可能であると云ふ。したがつてコロ種族のトーチズムの痕迹は暫く疑ひに附する必要がある。(一)

西藏の古傳説によると、その祖先は、猿と羅刹女の結婚したものであるが、同じ西藏系統に屬する黨項種族に就ては、隋書四夷傳に「黨項羌三苗の後也、其種宕昌白狼あり。皆獼猴種と稱す。」とあり、同種族なる西羌種族に就ては、後漢書西羌傳に、「衆羌と絶遠して、復交通せず。後遂に各自種をなす。或は旄牛種となる。越嵩羌是也。或は白馬種となる。廣漢羌是也。或は參狼種となる。武都羌是也。」と

云ひ、三國志烏丸附傳には、「媯羌より西、葱嶺に至る數千里。月氏余種あり。葱苾羌、白馬黃牛羌、各會豪あり。」と記し。その氏族が、旄牛、白馬、參狼、葱苾、黃牛、獼猴、白狼等の種なりと稱せしことを傳へておる。之は明かにトートテム氏族の存在せし事を語つてあるものである。

その外突厥が、狼種なりと信じ、狼の姓を稱し、その微號を崇敬してゐたことは云ふまでもない。かやうにある社會團體が、その祖先を動物なりと認め、その物をもつて名とし、之を崇敬する思想はトートテムズの痕跡であると云ひ得る。

支那の感生傳説もその直接の動機としては天の子なることを證せんとする心理が加はつておる事は、無論なるも。その女が外物に感じて妊娠すると云ふ形式は、未開人の間に行はれる原始的な妊娠に對する考の產物であらうと思はれる。恐らくかゝる思想は、古代支那人の間に弘く行はれ、後にカゝ支配者の階級にのみ残つたものであらう。然してかやうにその祖を動植物又は自然物に結びつける思想こそトートテムズの行はれた時代の主要思想であつて、よし感生傳説の存在を、たゞちに支那古代に於てトートテムズの存せしことを推測せしむる一證と出張することは不可能なるも、トートテムズときはめて類似せる思想が傳説時代まで存してゐたと云ふ證據となるのである。

(六) 轉生觀念と動物崇拜

トートテムズと直接關係あるらしい思想の證跡は、以上述べし如くであるが、その外トートテムズの間接の影響と思はれる靈魂動物の思想、動物崇拜の習俗、半人半獸の神々の信仰は廣く上代支那に行

はれてゐた。左傳莊公八年齊公貝丘に狩せし際、「大豕を見る。從者曰く。公子彭生也と。公怒りて曰く、彭生敢て見れんや。之を射る。豕人立ちて而して啼く。公懼れて車より墜つ。」とあり、彭生の靈の大豕となりしことを記してある。又左傳昭公七年に晉侯が、夢に黃熊寢門に入ると見、子産に何の厲鬼かと尋ねたるに、「堯鯀を羽山に殛す。その神化して黃熊となり、もつて羽淵に入る。實に夏の郊たり。」と答へ、鯀が、黃熊に轉生し、その子孫なる夏が、之を郊祭したことを傳へてある。此等の記事は、等しく靈魂が動物に轉生するといふ靈魂動物の思想に出づるものである。

又國語周語には、「我姬氏天龍より出づ。折木に及ぶ者は、建星及び牽牛あり。則ち我皇妣大姜の姫、白陵の後、逢公の馮る所の神也、」とあり、逢公が、死後上天して建星と牽牛に馮り、神となりし事を記してある。此傳説は、自然神話の影響あるも、やはり祖先の靈が、星に轉生すると云ふ轉生觀念に基くものである。

此轉生の思想、靈魂動物の觀念と相待つて支那古代の神々が、動物的性質を見へておる事も注意すべき點である。墨子の明鬼篇に、「昔秦穆公かつて晝日中に廟に處る。神あり。門を入り左す。人面鳥身、素服玄纁、面狀方正、…穆公再拜稽首して曰く、敢て神の名を問ふ。曰く、予を句芒となす。」とあり、句芒の神の鳥身なりし事を知りうるのである。列子卷二によれば「庖犧氏、女媧氏、神農氏、夏后氏、蛇身人面、牛首虎鼻なり。」と見え、史記本紀には、「始皇夢に海神と戦ひ、人の狀の如きを見る。占夢博士に問ふ。曰く、水神は、見る可からず。大魚蛟龍をもつて候となす。今上禱祠備はり謹めり。而るに此惡神あり、當に除き去るべし。而して善神致すべしと。……之衆に至りて、巨魚を見て、射

て一魚を殺す。」とあり、大魚蛟龍を水神の化身と見てある。同じく史記封禪書によれば、秦文公夢に蛇天より下りて、地につき、その口郵衍に止まると見、これを上帝の徴として郵時を作つて、白帝を郊祭してある。

かく動物をもつて神を象徴すると共に、上代支那人は、動物その物を神聖視してゐた。禮記郊特性に、「古の君子、之を使ひては必ず之に報ゆ。猫を迎ふるは其田鼠を食はせんがためなり。虎を迎ふるは其田豕を食はせんがためなり。迎へて而して之を祭る也。」と云ひ、禮運に「四靈以て畜となす。故に飲食由ふるあるなり。何をか四靈といふ、麟鳳龜龍之を四靈と謂ふ。故に龍以て畜となる。故に魚獮はす。麟もつて畜となる。故に獸狘らず。龜もつて畜となる。故に人情失はず。」と見えてゐる。なほ國語魯語に「海鳥爰居といふ。魯の東門の外に止まる三日、臧文仲國人をして之を祭らしむ。」とあり、左傳僖公十九年の條には、「古は六畜相爲に用ひず。」とあり、牛、馬、羊、豕、犬、鶏の類を祀りし事を傳へておる。

その他廟の祭器が、その形、その模様に於て多く動物の形をとれる事、その旗に動物を書けるもの多き事、宗廟の祭に羽をもつて舞ふ事等何れも動物崇拜の風習より出でたるものである。

古代支那人が、龜の甲、牛、羊、鹿、鶏等の骨をもつてそのト具としたのも、此等の動物をもつて、神聖視し、その骨に靈魂が宿つておると考へ、その神託は、人間の行動を判定する最良の手段なりと思惟した結果である。

かやうな動物崇拜の習俗は、靈魂動物の思想と共にたゞちにトリーテミズムの痕跡とは目しがたい。ト

トテム動物は、その子孫と信せられし特定の血族團體によつて崇敬せられ、一般人に尊敬せられるものでない。しかしトテム動物は、フレイザーの説によれば、トテムミズムの消滅せし後も動物神として一般的に崇敬せられるのが常である。又靈魂動物の思想もトテムミズムの産物として解せられる。故にかゝる習俗は、トテムミズムの存在を證する一の傍證となすことが出来る。従つてかゝる習俗の支那上代の社會に流布したと云ふことは、その傳説に於けるトテムミズムの痕跡と相待つて有史前に於ける支那民族の原始的な文化を窺はしむる鍵となるのである。

(七) 結 論

以上述べ來つた所を概括すると左の如くなる。

(一) 古代の姓の中には動物植物又は天然現象の名稱あり。

(二) 姓の祖先が、或自然物を司る官職に任せられ、子孫は、之を治むといふ傳説、並びに自然物をもつて官職の名とせりいふ傳説あり。此二項が、往古支那民族が、社會單位を動物植物、その他の自然物の名によつて別ち、その單位に屬するものが、同名物と親密な關係を有すと信じたトテムミズムの習俗の痕跡である如く見へる。

(三) 姓の祖先に關し母が外物によつて感じ、妊娠せりといふ感生傳説あり。此は自然物との間に親縁關係を認める點に於てトテムミズムと極めて類似せる思想である。此傳説がたゞちにトテムミズムの痕跡であるとは云ひ難いが、トテムミズムはかゝる思想の行はれた時代の産物であることだけは云ひうる。

(四) 上代支那には轉生の觀念あり。

(五) 半人半獸の神の信仰あり。

(六) 動物崇拜の思想あり。

此等の思想は、直接トーテミズムの産物と見ることは出来ぬがその存在の一傍證となすことが出来やう。要するに上代支那の文献の中にはトーテミズムの明白なる痕跡は、極めて稀薄であり、以上の事實から支那人が、トーテミズム時代を経過したとは斷言しがたい。然しながら之は、恐らく前號に述べし如くトーテミズムの發生すべき時代は、支那氏族の遠き過去に於て經過せるものであり、有史時代に入る彼等は、既に農業氏族として自然神の觀念を有し、高度なる文化を有しておつたためであらう。吾人はたゞ姓に關する傳説神話の中に残れる僅少なる古き生活の化石を探し求めえたことによつて満足しなければならぬのである。(完)

参考文献書目

James Frazer: Totemism and Exogamy, 4 vol. 1910 トーテミズムの資料を蒐集した前空の大作である。其第四卷にト

ーテミズム語學說に對する批評、自己の姪嬢トーテミズム説、及び異族結婚の起源を説明してゐる。

Arnold van Gennep: L'état actuel du problème totémique, 1920 Frazerの説に對する批評を初めとして諸學者のトーテ

ミズムに關する所説の概要を紹介批評したるもの。

S. Freud: Totem and Taboo, Tr. b. A. A. Brill; 1919 精神分析學の方面よりトーテミズムの原因を解釋してゐる。面白い見方であるが容易に信奉する事は出来ぬ。

支那古姓とトーテミズム (松本)

Andrew Lang: *The Secret of the Totem*, 1905. 原始的社會團體が、種名として動植物名を他族から賦與される。然して名と種名との間に密接な關係を認むる原始人の心理から該動植物をもつて己の祖先を思考し來つたのたゞらふ。

Herbert Sencer: *The Principle of Sociology*. vol. I. 1876. 二十二章七十節以下にトーテムの起源に言及してある。彼によれば動物の種名を有したる祖先を忘却混同したる子孫が、動物をもつて祖先を考へるに至つたのがトーテムの主たる起源だと言ふ。亦靈魂動物の思想も同様トーテムを誘起したる途へである。

W. Windt: *Völkerpsychologie*, vol. III. *Elemente der Völkerpsychologie*, 1912. 死者の靈魂が動物に轉生したる考へれ、その動物の信仰を生じたのがトーテムだと言ふ。スハムサーも同様な意見である。

Emile Durkheim: *Les Formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australia*. 主としてサーメントリアの材料に立脚し、彼一流の社會學的立場からトーテムの起源を論じておる。

Robert H. Lowie: *Primitive Society*, 1920. Goldenweiser に従ひ、ある一定の社會單位が、情緒的價值を有する目的物を結合する傾向であること、トーテムを定義し、トーテムに對する、タブー、トーテム繁殖の魔術儀式、動物名と氏族との聯合等はおのゝ格別の問題としてその特殊の起源を探る必要があること云つてその範圍を極めて狭めておる。

その他トーテムに關する文獻は、無數であるが、詳述は又後にゆづらう。支那古姓の研究に關しては、予の支那古姓氏の研究(三田評論、大正十年三月、四月、五月、六月號所載)を参照せられたし。